

## 感傷小説研究史とジェンダー

### —Jane Tompkins の *Sensational Designs* を中心に—

大野 瀬津子

#### I. はじめに

アメリカの感傷小説の研究は、文化研究の一環として 1930 年代に始まった。<sup>1</sup> しかし、文学としての感傷小説は認知されないままだった。あるジャンルの作品群が文学として認知されていたかどうかを測るひとつの基準は文学史である。それも複数の共著者が関わった文学史は個人の好みを捨象したものであるため、しばしば正統な文学史とみなされる。このような共著文学史を、アメリカ文学史の正統性を図る標準木としてみよう。1963 年に出版された複数著者による共同アメリカ文学史 *Literary History of the United States* の第三版では、感傷小説を系統立てて紹介する項目はなく、個々の作品が断片的に言及されるにとどまっている。<sup>2</sup> 感傷小説は 1988 年出版の *Columbia Literary History of the United States* において、ようやくひとつのジャンルとして認知される。<sup>3</sup> この文学史では、“The Rise of the Woman Author” という項目が設けられ、1820 年代から南北戦争直後までの女性作家たちの著作が時系列で論じられている (Elliot 289-305)。女性作家の作品という限定付きながら、感傷小説は文学史に組みこまれている。

アメリカ文学史のなかに感傷小説というジャンルを確立する立役者となったのは、1970 年代以降に登場するフェミニスト批評家たちである。1970 年代後半から 80 年代にかけて、Ann Douglas、Nina Baym、Jane Tompkins といった批評家たちが、女性作家の表現手段としての感傷小説に注目した。女性作家の感傷小説が文学史の一角を占めることができた背景には、こうしたフェミニスト批評家たちの尽力があったのである。<sup>4</sup>

フェミニスト批評家たちの仕事を嚆矢として、感傷小説研究は文学研究の一分野として定着し、今日まで発展してきた。先行研究を見渡してみると、大半の研究が、女性のジェンダーの問題と絡めて感傷小説を論じていることに気づく。感傷小説は女性作家が自家薬籠中の物とするジャンルだったのだ

から当然だろう、と考える向きもあるかもしれない。しかし、最近脚光を浴びているように、男性作家の作品でも、Donald Grand Mitchell の *Reveries of a Bachelor* (1850) は、19 世紀末までに 100 万部を売り上げるほどの人気を誇った (Lubovich 138)。また、修辞法に注目する近年のアプローチが明らかにしてきたように、感傷小説には頓呼法などのレトリックが駆使されている (Kete 83-102)。感傷小説をジェンダーの枠組みのなか限定して論じる必然性は無い。にもかかわらず、なぜ先行研究はジェンダーの問題を偏重してきたのか。

感傷小説研究を最初にジェンダーと結びつけたのは、フェミニスト批評家たちである。なかでも Jane Tompkins は、感傷小説研究の礎を築き、後のフェミニズム批評に多大な影響を及ぼしたとされている (De Jong 5; Chapman and Hendler 6)。本稿では、後の感傷小説研究を方向づけた胎動期のフェミニズム批評の代表例として Tompkins の *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction 1790-1860* (1985) を取りあげ、同書が感傷小説とジェンダーをどのように結びつけているのかを明らかにする。まずジェンダーが感傷小説の評価に抜き難くつきまとう様を先行研究全体から概観した上で、*Sensational Designs* の考察に移る。本稿を通じ、感傷小説研究がジェンダー批評の一部として発展してきた理由についてひとつの仮説を提示するとともに、先行研究の盲点を炙りだしたい。

## II. 感傷小説研究史とジェンダー

当初の感傷小説研究は、センチメンタリズム文化の観察を主目的としていた。1970 年代から 80 年代にかけて活躍したフェミニスト批評家たちが、ここにジェンダーの視点を導入する。本節では、感傷小説研究史におけるセンチメンタリズム研究からジェンダー批評への転調について整理する。

アメリカ感傷小説の研究は、E. Douglas Branch の文化研究、*The Sentimental Years: 1836-1860* (1934) を嚆矢とする。同書の目的は、19 世紀の中流階級のアメリカ人が様々な分野で成し遂げてきた過去の業績や彼らの抱く未来への展望を、センチメンタリズムの観点から活写することにあつた (vii-viii)。<sup>5</sup> “Literature: The Stuff” と銘打った章で Branch は、後年感傷小説として一括される小説群をセンチメンタリズム文化の証左として考察する。たとえば、Mrs. Susan Warner の *The Wide, Wide World* (1850) にはお涙頂戴のペーソスやモラルが、また Mrs. Lydia Huntley Sigourney の詩には死のペーソスや慰めの感情が描かれている、という具合だ。<sup>6</sup> ジェンダ

ーを焦点化する本稿で重要なのは、Branch が女性作家の作品だけでなく男性作家の作品にもセンチメンタルな要素を見いだす点である。すなわち、男性作家 Donald Grant Mitchell の *Reveries of a Bachelor* は、センチメンタリズムの一要素であるメランコリアの顕れとして解釈されるのだ (153, 155)。センチメンタル文化の総覧を主眼とする同書には、感傷的な心性をいづれかのジェンダーに帰属させようとする意図は見当たらない。<sup>7</sup>

これに対し、時代は下って、Tompkins とともに現代センチメンタリズム研究の礎を築いたとされるフェミニスト批評家 Ann Douglas は、その代表作 *The Feminization of American Culture* (1977) において、19 世紀アメリカ社会におけるセンチメンタリズムへの傾斜を明確に「女性化」現象として規定し、センチメンタリズムをジェンダーと結び合わせた (De Jong 5; Douglas 85)。産業革命後、社会的経済的地位を奪われた北東部中産階級の女性たちは、右肩上がりの成長途上にあった出版業界と手を組み、センチメンタルな著作の生産者として、消費者として、センチメンタル文化を牽引した、という (50-62, 80-81)。Douglas から見ればこの社会現象は、知的で男らしいカルヴィニズムの伝統から感情的で女々しいセンチメンタリズムへ、というアメリカ文化の「女性化」を意味した (3-22, 85)。だが文化の女性化を、Douglas は「失敗」とみなす (13)。センチメンタリズムの言説のなかで、女性には男性のモラルを向上させる救済者といった特権的役割が与えられた。しかしそうした特権的役割は、社会的経済的基盤の「代替物」以上のものではなかった (60-61)。センチメンタリズム文化は、社会経済から女性を排除し男性のヘゲモニーを温存する、女性の地位向上の阻害要因だった (13)。当然予想されるように、Douglas はこの文化現象の推進力となった感傷小説を非難する。男性を救済することでしか存在価値を見いだせない、他律的な「女性の役割意識」を無批判に再生産しているという理由で、大半の女性作家の改革運動や著作を手厳しくこき下ろすのだ (45)。<sup>8</sup> Douglas は、センチメンタリズムを女性性と結びつけ、女性の性的役割という視点から感傷小説を解釈する、感傷小説のジェンダー化の流れを作ったといえる。

Douglas と双璧をなすフェミニスト批評家 Tompkins も、*Sensational Designs* において、センチメンタリズムを女性と結びつける。そのことは、女性作家 Harriet Beecher Stowe の感傷小説を扱った章に、“Sentimental Power” というタイトルを付けていることから明らかだろう。しかし Douglas と違って Tompkins は、女性のセンチメンタリズムを否定的に捉える風潮には異議を唱える。彼女は、Perry Miller や F. O. Matthiessen らの

「男性に支配される学者の伝統」が、「女性小説の伝統」で描かれる世界観を棄却し、他の属性とともに感情を「女性の劣等性」と同一視してきたことを批判する (123)。この問題意識に基づき Tompkins は、「女性の視点から文化を再編成する記念碑的試み」に乗り出し、感傷小説を再評価する (124)。この批評家は、センチメンタリズムを女性と結びつけ、女性の役割という観点で感傷小説を読む点では、Douglas の態度を継承する。しかし感傷小説を高く評価する点で、Douglas と決定的に異なるのである。

Douglas と Tompkins の主張の対立は、アメリカ文学史上、「Douglas-Tompkins 論争」(Douglas-Tompkins debate) と呼ばれる重大事件となった。<sup>9</sup> かたや Douglas は、従属的な女性の役割を再生産する感傷小説を批判する。こなた Tompkins は、女性の立場から世界を再編成する感傷小説を評価する。Howard も示唆するように、Douglas-Tompkins 論争とは、煎じ詰めれば、男性優位のイデオロギーを感傷小説が助長するか攪乱するか、という感傷小説の政治性をめぐる意見の対立に他ならない。その後の感傷小説研究は、感傷小説中に描かれるジェンダーの問題を政治性と絡めて考察し、この論争の争点を反復再生産することになる (Howard, “What Is Sentimentality? 64)。

今日の政治的フェミニズム批評を代表する批評家のひとりが、センチメンタリティを 19 世紀アメリカ文化の中核と捉えたことで有名な Shirley Samuels である。<sup>10</sup> Tompkins 説の影響を自認する *Romances of the Republic: Women, the Family, and Violence in the Literature of the Early American Nation* (1996) のなかで Samuels は、19 世紀アメリカ文化が女性の立場や家庭の機能を政治とどう関連づけるか、という問題に関心を示す (22)。この文脈で Samuels が取りあげるテーマのひとつが、ドメスティック・イデオロギーである。これは、一方で女性を家庭の領域に釘付けにし、男性が参画する政治の領域から切り離しつつ、他方でその二つの領域の分離を自然化するイデオロギーを指す (14-17)。<sup>11</sup> だが女性を家庭のなかに囲いこむそのイデオロギーは、国家に奉仕すべき存在として女性を規定するという点において、根源的に政治的なものとの親和性をもつ (15)。Samuels は、Catherine Sedgwick の *The Linwoods* (1835) を始めとする感傷小説が、政治と無縁な理想的家族を描く一方で、家族が政治に絡めとられていく様も描いている、と論じる (17-18, 64)。つまり、ドメスティック・イデオロギーによって当然視されていた家庭と政治の棲み分けが曖昧になってしまう点に、感傷小説の政治的意義を認めるのである (18)。

Samuels の論に代表される政治的フェミニズム批評の流れに一石を投じたのが、Mary Chapman と Glenn Hendler 編集の *Sentimental Masculinity and the Politics of Affect in American Culture* (1999) である。同書の序文において、Chapman と Hendler は、先行研究がセンチメンタリティと女性性の結びつきを前提としてきた点に疑問を呈する (7)。二人によると、18 世紀にヨーロッパで生まれたセンチメント崇拜は「感情的な男性」(man of feeling) をモデルとするもので、アメリカにおいても、センチメンタリティはもともと男性性と結びつく概念だった (2-3)。にもかかわらず、従来のフェミニズム批評は、＜感情的な女性の家庭領域＞対＜理性的な男性の公共圏＞というジェンダーに基づく領域の分断を再生産し、感情的な男性の存在を不可視にしてきた、と二人は批判する (7)。<sup>12</sup> 男性もセンチメンタリティの言説に関与してきた事実を明らかにする同書を契機に、多くの批評家たちが男らしさとセンチメンタリティの結びつきに注意を向けるようになった (De Jong 30; Lubovich)。<sup>13</sup>

このように先行研究を辿ってみると、感傷小説研究はジェンダー批評の一部門として発展してきた、といっても過言ではない。そのトレンドを作ったのは、フェミニスト批評家たちだった。彼女たちがセンチメンタリズムを女性のジェンダーと結びつけ、感傷小説研究にジェンダーの視点をもたらしたのである。男性のセンチメンタリズムに注目する新たな潮流も、女性性から男性性へと対象を変えたジェンダー批評であることに変わりはない。

ただし最近では、形式面や修辞法の視点から文学上のセンチメンタリズムを考察するアプローチが、ジェンダー中心の研究史を塗り替えつつある (De Jong 8-9)。なかでも影響力の大きい批評家のひとりが Mary Louise Kete である (De Jong 8)。 *Sentimental Collaborations: Mourning and Middle-Class Identity in Nineteenth Century America* (2000) において Kete は、「共通の感傷に根ざした協働制作」(sentimental Collaboration) という概念を導入する (xv)。これは、共感を基盤として共通の知的・文化的プロジェクトに参加する現象を指し、家や家族や絆を失った際に、他者や神との感情的な絆を形成することで悲しみを乗り越える喪の手段である、という。<sup>14</sup> Kete は、読者・登場人物・作者間の境界、もしくは時間と永遠の境界を取り払う「頓呼法の修辞」(rhetorical trope of apostrophe) に注目する (39)。対象となるテキストのなかには、一般市民が身内で共同制作した記念アルバムを始め、感傷小説も含まれる (83-102)。Kete の分析は、女性だけでなく男性もセンチメンタリティの言語を共有していた事実を明示するとともに、レトリ

ックに注目することを通じて感傷小説研究の脱ジェンダー化の端緒を開いた、ともいえる (34)。

### Ⅲ. *Sensational Designs* とジェンダー

センチメンタリズム文化の研究として始まった感傷小説研究をジェンダー批評へと傾斜させたフェミニスト批評家たちの動機とは何だったのか。感傷小説に批判的な Ann Douglas は、*Uncle Tom's Cabin* に描かれた受動的な女性像への疑問から自著が生まれたことを示唆している (3-5)。しかし、感傷小説を高く評価した大半のフェミニスト批評家たちの研究は、感傷小説を文学のキャンノンから排除してきた男性批評家たちへの反発に動機付けられていた。たとえば Nina Baym は、アメリカ文学のキャンノンを決定的な男性批評家たちが、女性の経験に興味や共感を抱かず、女性作家の作品をキャンノンから除外してきた、と嘆く (*Woman's Fiction* 14)。また Jane Tompkins は、F. O. Matthiessen の *American Renaissance* (1941) が、女性作家の感傷小説を排除している点を問題視し、自著を *American Renaissance* に「対抗する試み」と位置づける (199-200)。<sup>15</sup> フェミニスト批評家たちは、文学史上の正典の編成と感傷小説の排除に相関関係を認めているのだ。本節では、後の感傷小説研究の方向性に大きな影響をもたらした Tompkins の *Sensational Designs* が、正典からの女性作家の排除とジェンダーの問題をどのように関連づけているのか詳説する。

Tompkins が挙げる感傷小説が正典から排除されてきた理由は、以下の四点に集約される。すなわち、大衆受けし、商業的成功を収めた点。現実離れた時代遅れの価値観に基づいている点。読者に行動を働きかけようとする点。女性による、女性のための、女性についての小説である点 (120)。つまり Tompkins は、感傷小説の大衆性、浮世離れ、政治行動の喚起、作者が女性であるという事実の4点が問題だったのではないかと推測している。ここでは、女性性というジェンダーの問題は、4つの理由のひとつとして言及されているに過ぎない。しかし、ジェンダーとは無関係であるはずの3つの理由に反論する過程で、Tompkins は正典からの感傷小説の排除をジェンダーの問題系へと還元していく。

序論では、感傷小説を大衆的だ、と決めつける風潮に対する反論がなされる。Tompkins によれば、従来の批評家たちは、ステレオタイプな人物造型、センセーショナルなプロット、陳腐な言語表現ゆえに、感傷小説を「大衆小説」として片づけ、「『真面目な』文学作品」のリストから除外してきた、

という (xiv-xvi)。大衆小説の特徴として批判されてきたこれら人物、プロット、表現の三要素を、Tompkins は逆手にとる。ステレオタイプな人物造型は社会の縮図の提示につながり、センセーショナルなプロットは社会変革を促すための基盤となり、陳腐な言語表現は教養のない読者の共感を誘う装置となる (xvi-xvii)。感傷小説の大衆的要素のなかに、同時代の社会を平易な言葉で描き、一般読者の心を動かして新たな文化を形成していく原動力を認める。この立場に立つと、まさにその大衆性にこそ、感傷小説の価値は見いだされることになる。実際、感傷小説が秘めた政治性を再評価する第 5 章、感傷小説は浮世離れなどしておらず大衆の現実を描いていたと反駁する第 6 章は、感傷小説の大衆性を擁護する側面をもつ。

第 5 章では、感傷小説が読者の政治的な行動を煽るという批判に対して、文学の評価基準に対する根源的な批判でもって応じる。Tompkins によれば、20 世紀の文学批評家たちは、独特の文学言語による事物の「表象」として文学を定義した。そのため、ありふれた言葉遣いで物事に「変化」を起こし、歴史の針路に影響を及ぼそうと意図する感傷小説は、文学として認められなかった (125)。従前の文学観を批判する Tompkins の評価基準は、物事を表象する言語技術の良し悪しではなく、一般大衆を感動させて物事を変える「政治的企て」の可否に定められる (126)。

Tompkins が取りあげる代表例は、Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* (1852) である。Tompkins は、国を説き伏せて南北戦争を引き起こし、奴隷たちを解放にいたらしめた点に、この感傷小説の説得力を見いだす (141)。しかし奴隷制廃止という歴史への影響力を認める Tompkins は、奇妙にもこの作品を「政治的失敗」と呼ぶ (141)。Stowe は、戦争ではなくキリストの愛によって支配される世界を理想としていた。だから武力による問題解決は政治的成功とはいえない (141)。奴隷制廃止が現実の歴史に与えた影響を軽視するこの批評家が、政治的に最も「転覆的」な要素として高く評価するのが「母権制」の理想である (142)。この小説では、神の化身たる女性が、家庭の台所から愛に満ちた言葉で人々に神の王国の実現を呼びかけているのだという (141-42)。Tompkins は、権力の中心を政治的領域から家庭の台所へ、権力の担い手を男性から女性へと書き換え、女性が支配する新しい社会を描いた点に、この小説最大の政治性を見いだす (145)。Tompkins が *Uncle Tom's Cabin* に読みとる政治性は、奴隷制度の廃止をもたらした大衆への影響力ではなく、家父長制度の変革なのである。

続く第6章では、感傷小説が現実から目を背けた時代遅れの価値観に基づく、という見方への反駁がなされる。「より暗い真実」の描写を文学の物差しに据える男性批評家たちは、感傷小説を「現実との接触」を失っているという理由で排除してきた(147, 148)。男性批評家たちの判断を覆すために Tompkins が例にとるのは、Susan Warner の *The Wide, Wide World* (1850) である。19世紀当時の社会では、人は祈りを通じて神から「精神力」を授けられる、という福音改革運動の「力の理論」が影響力をもっていた(151)。この小説は、物質的な力ではなく精神的な力を尊重する「力の理論」を福音改革運動と共有しており、まさしく当時の大衆が信じていた現実との接触をしっかりと保持している、と Tompkins は主張する(150)。

だがここで特筆すべきは、Tompkins が *The Wide, Wide World* から読みとる「精神力」が「母の権威」だという点である(163)。彼女は、自らの欲望に打ち勝ち自発的に父親や夫の意志に従う、という女性登場人物の「服従」(submission) に注目する(162-63)。女性登場人物は経済力や政治力を剥奪されている代わりに、服従という女性的な美徳によって、神にも等しい「母の権威」を得ることになる、と Tompkins は論じる(163)。このように Tompkins は、「力の理論」の言説を感傷小説へと接続する際、中性的概念であった精神力を女性の力へと読み替え、またしても女性のジェンダーを前景化するのである。

以上論じてきたように Tompkins は、感傷小説が同時代の大衆が共有していた現実的な世界観を描き、大衆の感情に訴えかけて社会を変えたのだと主張する過程で、母の権威や母権制の提唱という女性のジェンダーの力を前面に押し出して文学テクストを評価する。

Tompkins がそれほどまでにジェンダーを強調した理由は、女性作家の作品であるがゆえに感傷小説が排除されたのだという意識を強くもっていたからだと思われる。前節でも言及したように、第5章で彼女は、Perry Miller や F. O. Matthiessen, Harry Levin ら7名の男性文学批評家の名前を挙げ、彼ら「男性に支配された研究の伝統」が「女性の小説の伝統」の認知を妨げてきたことを批判する(123)。女性小説に描かれた世界観に対抗する男性批評家たちは、学生たちに、大衆性や感情や信仰を「女性の劣等性」と同一視するよう教えるとともに、文化的墮落の原因を女性作家の小説に帰したという(123-24)。こうして Tompkins は、正典からの感傷小説の排除を、男性批評家による女性作家の排除、というジェンダーの問題として前景化するのである。



序章で、自分がアメリカ文学のカリキュラムにおける女性作家の欠落に敏感なのは、「男性研究者に支配される分野の一女性」だからだ、と Tompkins は告白する (xiv)。続けて彼女は、20 世紀の批評家たちに中傷されてきた「女性作家が書いた小説の力と野望」を示すべく、2 冊の感傷小説を取りあげたのだ、とも語る (xiv)。これらの言葉に鑑みれば、Tompkins が女性のジェンダーを前景化した理由は明らかだろう。女性研究者としてのアイデンティティを強く意識していた彼女は、感傷小説が女性作家の作品ゆえにキャンノンから排除された、という側面を重く受けとめていた。ゆえに、排除の淵源となった女性性を肯定的に読みなおすことで、女性の感傷小説の文学的地位を高めようとしたのである。

だが見落とせないのは、議論の土台となる男性批評家による女性作家の排除を、Tompkins がきちんと論証していない点である。Tompkins は男性批評家の名前を 7 名も挙げて、彼らが女性作家の感傷小説を文化的墮落の感染源として切り捨てたと主張するが、彼らがそのような議論を展開したことを裏づける典拠を全く示さない (123-24)。もっとも彼女は、こうした感傷小説批判に与する批評家の代表として、Douglas の名前を注釈で出してはいる (217)。しかしその注釈においても、Douglas がどのように男性批評家たちの感傷小説批判を内在化しているか、といった分析がされるわけではない。ジェンダーを前景化する Tompkins の議論は、脆弱な前提の上に成り立っていた、と言わざるをえない。

#### IV. 結び

*Columbia Literary History of the United States* において感傷小説が初めて文学の一ジャンルとして取りあげられたとき、その項目のタイトルが “The Rise of the Woman Author” だったという事実は示唆に富む。感傷小説は、Tompkins を筆頭とする多くのフェミニスト批評家たちの尽力が叶う形で、まさしく女性作家特有のジャンルとして文学史に台頭したのである。<sup>16</sup> その後も感傷小説研究は、基本的にジェンダー批評として発展してきた。ここで本稿の冒頭で提起しておいた問題に立ち返ってみよう。なぜ感傷小説研究はジェンダーの問題に傾倒してきたのか。それは批評家たちが Tompkins の議論の前提を鵜呑みにし、感傷小説排除の理由をジェンダーに求めてきたからではないか、というのが本稿の結論である。

たとえば June Howard は、20 世紀前半の文学研究者たちが、家庭性や大衆性を対蹠点に据えて文学を定義し「男性化」した結果、女性作家の作品を

排除することになった、と論じる(“What Is Sentimentality?” 74-75)。また進藤鈴子は、Matthiessen が「男らしさ」を基本概念とするアメリカらしさを文学の選考基準としたため、女性作家の作品を除外することになった、と述べる(6)。二人とも Tompkins の前提を踏襲し、女性が作者であるがゆえに正典から感傷小説が排除されてきたと考えている。

果たして 20 世紀の男性批評家たちは、本当に女性の小説であることを理由に感傷小説を正典作品群から排除してきたのだろうか。前節で指摘したように、Tompkins 自身はこの問題についてきちんと吟味していない。上述した Howard や進藤の論稿にも、さらには筆者の目に触れたその他の批評家の論稿にも、この問題についての論究は見当たらなかった。<sup>17</sup> どうやら先行研究は、この問題を解決済みと考えているようだ。現在、感傷小説研究には、様々な新展開が見られる。今後の研究の可能性を見極めるためにも、男性批評家たちの研究書を紐解き、彼らがどのような理由で感傷小説を文学史上の必読文献としなかったのか、再考する試みが求められている。

## 注

※本稿は、平成 27 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)挑戦的萌芽研究、課題番号 15K12857 による援助を受けている。ここに記して感謝申し上げます。

1. 感傷小説の人気のピークは 1850 年代だった。James D. Hart は、「女性の 50 年代」という Fred Lewis Pattee の言葉を引き、1850 年代がいかに女性作家の天下であったかを説明する(92)。Hart によれば、その 10 年間に発表された Hawthorne、Melville、Whitman、Emerson の著作を全て合わせても、女性作家の家庭小説一冊分の売り上げにも及ばないほどだった、という(91-92)。感傷小説は家庭小説とも称されるが、本稿では原則として、感傷小説という呼び名で統一する。
2. たとえば *Charlotte Temple* (1791) を始めとする 18 世紀末の小説が “The Beginnings of Fiction and Drama” の冒頭に収まる一方、*Uncle Tom’s Cabin* (1852) など南北戦争前後の小説は “Literature and Conflict” の項目に入れている (Spiller 177-78, 563-86)。
3. *Literary History of the United States* の出版(初版:1947, 第二版:1953, 第三版:1963) から *Columbia Literary History of the United States* (1988) に

いたるまでの期間、複数の共著者が協働するアメリカ文学史は出版されなかった。Stokes 1-2; Vanderbilt 236 参照。

4. *Columbia Literary History of the United States* 中の “The Rise of the Woman Author” を担当したのは、フェミニスト批評家の草分けの一人、Baym だった。
5. Branch はセンチメンタリズムを、現実認識の拒絶、現実判断能力の欠如、神話への執着として定義し、現実認識、現実的判断能力、神話への執着の三要素によって特徴づけられるロマンティシズムの幼生として位置づける (viii)。
6. Branch 131, 136, 137 を参照。
7. Herbert Ross Brown の *The Sentimental Novel in America 1789-1869* (1940) は、Branch の研究より包括的に感傷小説というジャンルを扱い、センチメンタリズムを女性と結びつける (100-65)。とはいえ、Brown は男性作家にもセンチメンタルな心性を見ており、ジェンダーの意識は後のフェミニスト批評家ほど強くはなかったと考えられる (322)。Chapman and Hendler 4 も参照。
8. Douglas は、男性に依存する女性の役割に挑戦した例外的な女性作家として、Margaret Fuller と初期の Harriet Beecher Stowe を高く評価する (262, 65)。ちなみに同書には、Donald Mitchell、Nathaniel Willis ら男性作家の感傷小説への言及もある。ただしそれらは、男性作家が抱く女性への支配願望を表した大衆小説として簡単に片付けられる (239, 235)。
9. 名付け親は Laura Wexler である (Wexler 9)。その後 Douglas-Tompkins 論争は、多くの批評家が議論するところとなった。Howard “What Is Sentimentality?” 63-64 参照。
10. Samuels, Introduction 3-4; Kete 16; 進藤 169 を参照。なお Samuels は、最近上梓した 19 世紀アメリカ文学史 *Reading the American Novel 1780-1865* (2014) のなかで、女性の感傷小説の解説に 1 章分を割いている (119-50)。
11. その最たる例が、女性に与えられた「共和国の母」としての役割である。家庭に閉じ込められた女性は、政治の領域から分断される代わりに、家庭で愛国的な子どもを育てることを通じて、つまり「共和国の母」になることによって政治的役割を果たす、とされていた (Samuels, *Romances* 15)。
12. June Howard も同様の指摘をしている。Howard は、先行研究がセンチメンタリティと女性性を私的領域のなかに囲いこんできたと批判し、男性が支配する公的領域と女性が支配する私的領域、というジェンダーに基づく領域の二項対立的図式そのものを見直すことを提案した (“What Is Sentimental-

ity?” 72-73)。Howard は *Publishing the Family* (2001) では、自らこの二項対立的図式の歴史化を実践している (231-41)。

13. *Sentimental Men* の巻頭論文で Vincent J. Bertolini は、Donald Mitchell から男性作家の小説を、家庭の炉辺で空想する独身男性のセンチメンタリティに注目して論じている。また最近の研究の一例として、Maglina Lubovich は、所有することなく失ってしまった「空想上の『欠如』」を悼む喪の行為として、*Reveries of a Bachelor* に描かれた独身男性のメランコリーを解釈する (127)。
14. Kete xiv, xv, 17, 31-32 参照。
15. Tompkins は、男性批評家のなかでも特に Matthiessen を意識していた (Tompkins 200; 大井 25)。なお *Sensational Designs* では、Charles Brockden Brown や James Fenimore Cooper から男性作家についても、それぞれ 1 章分が割かれて論じられている。ただし Tompkins は、男性作家の小説は既に「正統な文学研究の対象」として認められており、女性作家の小説ほど真剣にその価値を論証する必要はなかった、と示唆している (119-20)。彼女が女性作家の読み直しの方を急務と考えていたことは明らかである。
16. Samuels は、Tompkins や Baym らの目的が女性作家をキャンノンに組みこむことにあった、と述べている。 (*Romances* 22)。
17. Howard は、女性が作者であることを理由に感傷小説が排除されてきた、という説の提唱者として、文学史研究者 Paul Lauter の名前を挙げる (“What Is Sentimentality?” 75)。たしかに Lauter は、1920 年代にアメリカ文学のキャンノンから女性が排除された背景を、文学研究の専門化、文学理論の構築、文学史の時代区分、という三つの観点から考察している。だが Lauter もまた、Tompkins 同様、男性批評家の研究書から引用しておらず、十分な証拠を提示しているとはいえない。Nina Baym の “Melodramas of Beset Manhood: How Theories of American Fiction Exclude Women Authors” もキャンノンからの女性の排除というメカニズムについて論じているが、実証はできていない。Lauter と Baym の論文についての考察は稿を改めることにする。

### Works Cited

- Baym, Nina. “Melodramas of Beset Manhood: How Theories of American Fiction Exclude Women Authors.” *American Quarterly* 33.2 (1981): 123-39.
- . “The Rise of the Woman Author.” *Elliot* 289-305.

- . *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America, 1820-1870*. Ithaca: Cornell UP, 1978.
- Bertolini, Vincent. "Fireside Chastity: The Erotics of Sentimental Bachelorhood in the 1850s." Chapman and Hendler, *Sentimental Men* 19-42.
- Branch, Douglas E. *The Sentimental Years: 1836-1860*. 1934. New York: Appleton-Century, 1965.
- Brown, Herbert Ross. *The Sentimental Novel in America 1789-1860*. 1940. New York: Pageant, 1959.
- Chapman, Mary, and Glenn Hendler. Introduction. Chapman and Hendler, *Sentimental Men* I-16.
- , eds. *Sentimental Men: Masculinity and the Politics of Affect in American Culture*. By Chapman and Hendler. Ed. Berkeley: U of California P, 1999.
- De Jong, Mary. Introduction. De Jong and Bennett 1-12.
- De Jong, Mary, and Paula Bernat Bennett, eds. *Sentimentalism in Nineteenth-Century America: Literary and Cultural Practices*. Madison: Fairleigh Dickinson UP, 2013.
- Douglas, Ann. *The Feminization of American Culture*. 1977. Farrar: Noonday P, 1998.
- Elliot, Emory, et al., eds. *Columbia Literary History of the United States*. New York: Columbia UP, 1988.
- Hart, James D. *The Popular Book: A History of America's Literary Taste*. Berkeley: U of California P, 1950.
- Howard, June. *Publishing the Family*. Durham: Duke UP, 2001.
- . "What Is Sentimentality?" *American Literary History* 11 (1999): 63-81. *Oxford Journals*. 31 July 2008 <<http://alh.oxfordjournals.org>>.
- Kete, Mary Louise. *Sentimental Collaborations: Mourning and Middle Class Identity in Nineteenth-Century America*. Durham: Duke UP, 2000.
- Lauter, Paul. "Race and Gender in the Shaping of the American Literary Canon: A Case Study from the Twenties." *Feminist Studies* 9 (1983) : 435-63. *JSTOR*. 15 Nov. 2015 <<http://www.jstor.org/stable/3177608>>.
- Lubovich, Maglina. "Desired and Imagined Loss at Sympathetic Identification: Donald Grant Mitchell's *Reveries of a Bachelor*." De Jong and Bennett 123-39.

- Samuels, Shirley, ed. *The Culture of Sentiment: Race, Gender, and Sentimentality in Nineteenth-Century America*. New York: Oxford UP, 1992.
- . Introduction. *The Culture of Sentiment* 3-8.
- . *Reading the American Novel 1780-1865*. Chichester: Wiley-Blackwell, 2014.
- . *Romances of the Republic: Women, the Family, and Violence in the Literature of the Early American Nation*. New York: Oxford UP, 1996.
- Spiller, Robert E., et al., eds. *Literary History of the United States: History*. 3rd ed. Rev. ed. New York: Macmillan, 1963.
- Stokes, Claudia. *Writers in Retrospect: The Rise of American Literary History, 1875-1910*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2006.
- Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction 1790-1860*. New York: Oxford UP, 1985.
- Vanderbilt, Kermit. *American Literature and the Academy: The Roots, Growth, and Maturity of a Profession*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1986.
- Wexler, Laura. "Tender Violence: Literary Eavesdropping, Domestic Fiction, and Educational Reform." Samuels, *The Culture of Sentiment* 9-38.
- 大井, 浩二. 『センチメンタル・アメリカー共和国のヴィジョンと歴史の現実一』. 関西学院大学出版会, 2000.
- 進藤, 鈴子. 『アメリカ大衆小説の誕生—1850年代の女性作家たち』. 彩流社, 2001.